

異文化経営学会賞

2013 年度学会賞は下記の 2 名に授与されました。

論文部門

荒木 謙一郎（神戸大学大学院）

「語りの中の異文化コンフリクト：構築主義的アプローチ」

（『異文化経営研究』第 8 号 2011 年 12 月 28 日）

研究発表部門

木村 友保（名古屋外国語大学）

「外国語大学におけるグローバル人材育成プログラムー語学教育と専門的教育の両立を目指して」（2011 年 11 月 29 日発表）

学会賞 講評

学会賞委員長 林 倬史（国士舘大学）

論文部門

同論文は、「異文化コンフリクト体験」を、対話的ナラティブインタビューという視点から検討したオリジナリティに富むと同時に、全体的に論文としてのスタイルとストラクチャーを十分に踏まえている点が高く評価された。

研究発表部門

同研究発表は、教育体験を踏まえた論理展開となっているため、論旨が明確かつ首尾一貫しており、聴講者に対して説得力を持っていた。またテーマ的にも、日本の大学が抱えているグローバル人材の育成とそのジレンマに関する示唆に富む内容であったため、参加者との多くの質疑応答によって会場を活性化させた。

受賞のことば（論文部門）

荒木 謙一郎（現・エレクトラ株式会社）

「語りの中の異文化コンフリクト」は、私が生まれて初めて学術雑誌に投稿した論文である。当時私は、外資系医療機器企業の経理部長をしながら、週末は神戸大学経営学研究科の金井先生の指導の下で、博士論文の材料を集めてみたものの、それをどのように加工したらいいものか迷っている最中だった。尊敬する馬越会長から研究会で発表してみないかと思いがけず声をかけられた。それまで学会発表と無縁な私は、それがどのようなものか知らないまま拙い発表を済ませた後、異文化経営ご専門の先生方から貴重なフィードバックの数々を頂けた事は幸いであった。

そのときのコメントも踏まえて、発表内容を大幅に書き換えたのが本稿である。二名の査読者からも更に貴重なご指導を頂けた。大きな恩恵を異文化経営学会から授かったことに感謝の念が耐えない。指摘された未解決な論点は、幸いなことに、その後も（長い通勤電車の中で）考え続けることができた。残りのインタビューも加えて、本投稿論文を博士論文として発展させることができたのは、それから二年以上経った 2013 年の一月である。最終章をパソコンで書き終えたのは、提出期日当日の伊丹空港から神戸三宮に向かうバスの中だった。

社会人として研究を始めて六年の歳月が経った。文化人類学、組織シンボリズム、文化構築主義、物語論、認知言語学と私にとっては初めての分野ばかりであり、通勤と週末の時間に、無我夢中で勉強した歳月でもあった。それだけにご専門の先生方からのコメントは砂に染み通る水のように吸収された（と思う）。お世話になった多くの師やインタビューに応じて頂いた多くの経営者、経営上級管理職の皆さんへ感謝を捧げたい。

加護野先生がよく仰っていた「（大海知らずの）井の中の蛙、（井戸の底から天空の一点を毎日見つめるので）天の深さを知る」心境に一步でも近づけたらどうか。受賞を励みに、今後とも精進あるのみである。

受賞のことば（研究発表部門）

木村 友保（名古屋外国語大学）

異文化経営学会が 10 周年を迎え、その記念として新しく設定された「異文化経営学賞」の第一回目の学会賞「発表の部」を授与され、大変名誉に思います。しかし正直なところ、この学会への入会是比较的新しく、かつ研究会発表を聞かせていただいて、そのレベルの高さに毎回感服している身としましては、大変な驚きであったことは否めません。

私の発表は、2011 年 11 月 19 日に開催された本学会第 26 回研究会において報告をした「外国語大学におけるグローバル人材育成プログラム—語学教育と専門的教育の両立を目指して」で、発表の最後にもお伝えしたように、「中間報告」でした。その努力は今も続いており、今年の 4 月より新しい学長が東京外国語大学から来られて、ますますその努力をせねばと痛感しているところです。というのも、「すべての教育を英語で行う」ことがさらに強く要求されつつあるからです。ただし、経営学部と外国語学部を卒業した者としては「専門的教育を英語で行う」には何重もの下準備が不可欠であることも知っております。そして、発表でも強調したように、大学側がどんなに留学制度や外国人教員を増やすなどハードの面を充実させても、それだけでは「グローバル人材」の育成は不可能です。「グローバル人材」とは何かを問いつづけ、その意味に基づく人間を育てるには何が具体的に必要かを考え、できることを一つずつ実行し、常に高い目標を目指しつつ、定期的に振り返ることが大事であると考えます。そのためにはそこで働く一人ひとりの教員が「学び続ける人間」でなければなりません。

今もドラッカーの本を読み続けておりますが、ビジネスの世界でも学び続ける企業こそ成功するといいます。学会も同じだと思います。その点、本学会の研究会が常にその様相を呈していることに誇りを感じております。将来の設立を考えている中部部会もそのような部会になるようじっくり構想を練っていきたいと考えています。